

幼 兒 教 育

第二十一卷
第十二號

大正十年十一月十五日發行

異常兒の幼稚園

東京高師教授 樋 口 長 市

私は、去る五月、二年半餘の歐米諸國の見學旅行から歸りましたが、アメリカには一年四ヶ月、ロンドンに二ヶ月、パリに五ヶ月、後の日數はイタリ、ア・スウヰス、ドイツ等の旅行に費しましたので、最も長く滞在致しました米國の兒童教育に就いて、此處に一寸申上げたいと思ひます。米國では、婦人たちが主として兒童の教育に従事して居りまして、實に完備した社會事業が多種ありますが、中でも米國に於てさへ極く新しい事業と見られますのは、各種異常兒の幼稚園であります。未だ日本には是等の幼稚園が設立されてないと思ひますから、大體の有様を述べて見ませう。

異常兒といふのは、生れつき、或は生れてから後、

即ち先天的に後天的に、精神や身體の上に、普通の兒童と異つてゐるものを申すのであります。例へば、低能兒、不良兒、盲兒、聾兒、言語障礙兒(吃)、不具兒、腺病質兒童、結核質兒童、榮養不良兒、神經質兒童、癲癇兒童等であります。

従前の考へから云へば、是等の兒童は學齡が遅い方がよいとされ、普通の兒童が滿六歳を以て小學校に通ふのに、異常兒は十歳、十二歳過ぎて始めて通學させるやうでありました。之は、異常兒は普通の兒童よりも、身の仕末が早く出來ないから、教へ導く先生も倍の手續がかかるし、兒童自身も人の中に出て萬事つらい思ひをしなければならぬから、と云ふ事にあつたのでした。

所が最近の意見に依りますと、異常児は却て普通
児童よりも早く教育を施した方が、結果がよろしい
といふ事になりました。此の目的の爲めに、歐米諸
國には異常児の幼稚園が起つて來たのであります。

先づ盲兒幼稚園から申上げますれば、アメリカ合
衆國には總てで四つの盲兒幼稚園があります。その
中で私が參觀致しましたのは、ボストンの盲兒幼稚
園でありました。

ボストンの盲兒幼稚園には二十名の盲兒が居りま
して、最も年上の児童は五歳、最も年下のは未だ乳
呑兒で寢牀にねて居りました。是等につきそふ保母
は四名居ります。この幼稚園は、ボストン市の存在
するマサチューセツ州内に住する盲兒を收容するた
めに設立されてあるのですが、唯今は米國內に唯四
つしか此種の幼稚園がない爲め、マサチューセツ州
ばかりでなく、他の附近の州の児童も亦此處に來て
ゐます。

この幼稚園へ盲兒を家庭から送り迎へするのは困
難な事でもありませんし、また盲兒に施す教育は寢起
も共にさせて保母たちにすつかり託した方が効果も
あがるので、この幼稚園の盲兒は總て家庭的な寄宿

に入る事になつてゐます。園兒二十名の中十分の四
は白内障でありました。園兒は月三弗即ち六圓の費
用を支拂ふ事になつてゐますが、貧困の爲めや其他
特別の事情ある時は、全然費用は取りません。たつ
た三弗位のお金では實際何にもなりませんで、どう
してもいくら安くも一人の児童に十弗は入りますの
で、是等の費用の不足な所は、寄附金によつて補つ
て居ります。

園内を見ますと、室内は普通の家庭と全く同じに、
食卓もあり、椅子もあると云ふ風で、私共から考へ
ると盲兒がそれらにつまづいて不便だらうと思ふの
であります。之はわざとかうして普通の家庭と同
じにして、盲兒を最初から馴らしてしまふのださう
です。盲兒たちは、ちやうど目が見えるかのやうに、
活潑にその中をどびまわつて居りました。

溜所には楽しさうに話し合つてひなたぼっこをし
てゐる可愛らしい盲兒も居りました。冬季にはこの
溜所をしめきつて温室のやうにして遊ぶ様に出來て
ゐて、玩具をいぢつてゐるのもあれば、木馬に乗つ
て喜んでゐるのもあり、又鈴の音でもつて鈴の配列を
かへる遊戯などしてゐるのもありました。

庭には、木馬、ブランコ、スベリダイ等、皆自由に用ひて盲兒が嬉々として遊んで居るのを見まして、ブランコなんかやつて怪我をしないかと、却て見てゐる者がはら／＼しますが、保姆は平氣でちつとも干渉してゐませんでした。

この盲兒幼稚園の園長のお話に依ると、盲兒だから可愛いさうだ／＼と云つて、大人が手助けばかりしてやると、却て兒童の發達をさまたげる、危険のない範圍で、自由に何でもやらした方が、早く一人前になる、と云ふ事でした。

尙、アメリカでは盲人の出来るのを豫防する爲の會が組織されてゐて、盲兒をなくなすやうにするにはどうしたらよいかを、色々と研究した出版物を出し、全國にこれを配布してゐるのであります。世界で盲人の一番多いのはアメリカと日本でありまして、盲人になる原因にも色々ありませうが、親の不注意の爲に盲兒にしてしまふ等と云ふのは、最も可愛いさうな事で、一方から云へば最も豫防し易い事です。母親への注意等はくわしく書いて、絶えず宣傳されてゐます。

私がこのボストンの盲兒幼稚園に訪問しました時

に、園長は盲人豫防の宣傳が效を奏したと見えて、今年はこのマサチューセツ州から盲兒が一人も此處に來なかつた、と云つて大變喜んで居られました。これを見ても著々として良結果を得てゐるらしいのでありますから世界中でアメリカと共に盲人國と云はれてゐる我國に於ても、盲人豫防の宣傳を盛にやりたいと思つてゐます。

さて盲兒幼稚園で滿六歳まで教育をうけますと、普通の兒童の通學する小學校に入學させ、特別學級として三年間は點學を以て讀方、書方、算術を教授し、そのなかで話し方等といふ學科になると、普通の子供の中に交せて學ばせ、程度もすつかり同じにしてゐます。尋常四年生になると、全然普通兒童の間に交せて何等異つた教育をしません。小學校を卒業したものは、更に中學、大學と普通兒童と共に進みます。高等の學校へ行く程の能力のない盲兒は、早く職業を授けて獨立させ、立派な市民として一生を幸福に送らせます。

このやうな有様を見まして、目などはなくてもかまはないと、思つたほど、驚嘆しました。

次には聾兒幼稚園であります。之は先にお話し

た盲兒幼稚園の兒童が寄宿してゐるのと異り、此の方の園兒は皆通學生であります。聾で話す事の出来ない子供は、讀唇法を唱へて、人の唇を見てその動き方で云ふ事を了解するやうに教育するのでありますから、寄宿生にすると、その寄宿にゐる保姆とか友達とかの唇ばかりを讀む事に馴れ、他の人の唇はわからなくなる恐れがありますので、通學生にして置きます。さうすれば幼稚園の往復の途上の人々、電車内の人々、父兄姉妹の唇など、多くの機會に接し得るからであります。

私が參觀しましたのは、フィアデルフィアの公園内にある聾兒幼稚園でありまして、建物は二箇より成つて居て、體操場もあり、附屬病院もあり、十間に二十間の大きさで冬は湯、夏は水を入れる水泳場もあります。こゝに寄宿舎が二軒ありまして、三十人の兒童がをりますが、之は前にも云つた通り、通學生を希望してゐるのでありますが家が非常に遠方であつたり、又世話する人がなかつたりする子供等の爲めに、設立されてゐるのです。

十人程の聾兒を一級として、能力の同じなものを教室内に集めて居りますが、年上の兒は九歳、年下

のは四歳でありました。園長のお話では、四歳でも少し遅すぎる、聾兒の教育は二歳位からがよい、との事でした。

教育の方法は、教師が言語を發して見せ、兒童が唇の動き方を見て知るといふので、この教育の仕方の教科書も用ひてゐて、單語から複雑な思想に至る迄、次第に了解するやうに、兒童を教へるのであります。又兒童が自分の考へを表はす時に、發音の方を教へ、唇をかう云ふ格好にすればこの音が出る、又先生の喉をさすらせて、この音の時は喉はかう云ふ振動をする、といふやうに丁寧に教へこむのであります。五歳位の聾兒でも、日常の一寸した用事は、自分も言葉話し人の言葉も了解してゐます。

英語は御存じの通りアクセントが大切でありますので、聾にアクセントをどうして教へるか云ふに、それには音楽をやつて行きます。音楽の時間には、兒童は頭をピアノにぴつたりとつけて、先生が弾くのを聞いてゐます。さうしてピアノの振動を、肉體に感じて、それによつて音楽の高低を知り、其の高低を身振りであらはします、それから先生は、四五間はなれた所で、笛、太鼓、鈴などで音楽をやつて見せ

て、今度は兒童にひとり／＼やらして見ますと、先生と同じやうに高低をつけてします。かうなれば、アクセントを教へることが容易に出来るのです。

聾兒も盲兒と同じく、幼稚園を経ますと小學校へ入學させ、始め三年間は特別學級とし、あとは普通兒童の中に混じて教育してゆき、中學、大學と進ませます。

セント・ルイ(シカゴの南方)の小學生の聾兒でありましたが。私が英語で云ふ事をすらくと了解しました。私は語學が不得手でありまして日本人風の英語でありましたので、時々子供が變な顔をしますので、ノートを出して綴つて見せると、解つたといつて大喜びでした。かうして數分話してゐる中に、人なつつかいアメリカの兒童の事ですから、直ぐ仲よしになつてしまつて、終には、「あなたは奥さんや子供があるか」、「なぜ奥さんをつれて來ないのか」とか、「お年はいくつですか」等と大分きわどい質問をされて閉口してゐると、校長が出て來られて、「そんな事をお尋ねしてはいけない、失禮だから」と叱られて、私に握手してにこ／＼とひつこんでゆきました。この兒の無邪氣さを今でも思ひ出して笑ひたへ

なります。

又ワシントンの専門學校に行きますと、其處にも聾の生徒が普通の學生の間にまじつて熱心に聽講してゐました。文科でしたので、ラテン語、フランス語等を自由に了解し話してゐるのを見て、生れながら耳が聞え話がよく出来るのに、私どもはなかく外國語が發達しにくいのを見て、はづかしく感じました、又同じ學校の理科の方にも聾生徒が居て實驗をしてゐましたが、案内してくれた理科の學長は、聾の卒業生でも就職口には一向ひげを取らない、實驗研究には耳が聞えぬ方が氣が散らなくつてよいと云ふので、どん／＼社會へ出て歡迎される、と云つて居りました。

其他アメリカには、低能兒や不良少女の爲めに、幼稚園のやうな設備が澤山してあります。一二歳の幼兒は低能兒だかどうかを見て、三歳にもなれば充分低能兒だと云ふ事がわかりますから、その時には、適當な場所につれて行つて教育する方が、その子供の異常な度合をさめ、ひどくならぬやうにするばかりでなく、社會の平和の爲にもその方がいいのであります。

オハイオ州のコロンバス市に白痴院があります
が、其處には未だ白痴とまらない五六人の幼児が來
てゐて、白痴か普通兒か、鑑定して貰つてゐました。
低能者の中でも、道德的低能といふのがあつて、
性の道德観が缺けてゐまして、本能のまゝに行動す
るのがあります。殊に少女がこの種の低能になると、
おそろしい事には十三歳で子供を産み、十五歳で二
人子の母となり、しかも父親が不明であるのですか
ら、實に困るのであります。このコロンバスの白痴
院にもこの種の少女は、子供と共にひきこつて世話
して居ります。

低能者の母から生れた子供が必ずしも低能者だといふ事がありませんから、かうして白痴院で育て、みて普通兒であれば、早速他の孤兒院へ送り出すやうにしてあります。低能の少女は、十三歳以下の者、十三歳から十六歳迄、十六歳以上と分けて生活させて置きました、よい方になつて再び罪をかすまいと思つたものは、兩親のもとにかへし、もし兩親がなければ獨立してゆかれるやうな手段を取つてやります。

アメリカの田舎には、白痴村、不良少年少女村と

も云ふべきものがありまして、犯罪性をおびた異常兒は都會から離して生活させてあります。さうして女子であればメリアス編み、洋服仕立て、洗濯等の業をあたへ、正しい労働と、音樂、會合等の清らかな娛樂によつて、忙しく楽しく生を送らせてゐます。結婚は優生學の見地から禁じるやうにしてあります。

不良兒の幼稚園と云ふべきものは、ロスアンゼニスの感化院であります。十二歳迄の兒童を收容してゐますが、中には五歳にして三回も家を飛び出したといふのが居りました。設備と云ひ、教育と云ひ、實に完備したものでした。

さて従來はこのやうな異常兒教育上の事業は、慈善事業、人道問題の方からなされてゐましたが、現今では社會事業、社會問題の方からなされてゐます。